

中山きく(元白梅学徒隊)

私は、太平洋戦争が勃発した昭和16年に「県立第二高等女学校」に入学しました。

戦時下とあって正規の学習環境は失われ、衣・食も困窮する中、戦時訓練や陣地構築作業に精出す日々でした。当時は「命は国に捧げるもの」であり「戦争を勝ち抜くことが使命」と信じて疑いませんでした。

昭和19年10月10日の南西諸島大空襲で、人が殺され、形ある物すべてが破壊され、貴重な文化遺産も失って、私たちは初めて戦争の実態を思い知らされました。更に、沖縄が戦場になった昭和20年3月、私は女子学徒隊として陸軍野戦病院の補助看護婦に配置され、筆舌に尽くし難い悲惨な体験をしました。6月初めには病院からの解散命令を受け、鉄の暴風と形容される地上戦を彷徨すること約1ヶ月。修羅場をくぐり抜けて九死に一生を得ました。しかし、白梅学徒仲間22名の戦没を知って「生きているのが申し訳ない」と思い続けました。

戦後の無いないづくしの難民生活の中で、明るく無心に遊ぶ子どもたちの姿から私は生きる力を得ました。それが小学校教師になるきっかけでもありました。在職中は自らの学徒体験を語ることは出来ませんでした。が、「命の尊厳と平和の尊さ」を理念に教壇実践をしたと言えます。

戦後30年も経った頃、私は被爆地の広島・長崎に住む機会があり、「生かされた者として、白梅学徒隊の沖縄戦を後世に伝え遺そう」と思うようになりました。白梅学徒看護隊の記録『平和への道しるべ』を共著したのは戦後50年も経っていました。

その後、私は「沖縄戦の記憶を継承する」証言活動を始めて現在に至っています。

「沖縄戦を風化させてはならない」との私の思いは伝わりました。沖縄戦の元女子学徒有志で構成する「青春を語る会」と交流している「広島経済大学岡本ゼミナール」の学生たちが、7か年をかけて沖縄戦の女子学徒隊について学習し、小冊子『オキナワを歩く・DVD付』を全国に発信しております。「沖縄尚学高等学校・地域研究部」の生徒たちによる「白梅学徒隊の足跡をたどれ」プロジェクトも着実に継承されています。

私は、沖縄戦の教訓として、<戦争は人類にとって最も不幸な忌むべき行為である>ことを伝え続けます。

終わりに、沖縄県退職教職員会女性部と池宮城けい様・比嘉美津枝様・磯崎主佳様に、沖縄継承にかける私の小さな歩みを、この絵本で応援して下さいことに感謝し、心からお礼を申し上げます。そして私の話を聞いて下さった方々、この絵本を読んで下さった方々、その他すべての方に次の言葉を贈ります。

「私のような戦争のある人生を歩まないで下さい」

絵本『白梅学徒隊 きくさんの沖縄戦』より